

つながるのは、人と人。 そして今日と明日。

陸前高田市災害ボランティアセンター

所長 ほし たくふみ 星 拓史さん 活動主任 はぎわら ふみ 萩原 史さん

3.11の東日本大震災は、その被害の甚大さもさることながら、全国、全世界から数多くの支援、ボランティアが被災地に集まったことで、人と人とのつながりが見直された出来事でもあります。そのつながりの中心となるのがボランティアセンター。日によっては1000人を超える参加者が集まる陸前高田市のボランティアセンターを訪ね、お話をうかがいました。



陸前高田市街から少し離れたところに建つボランティアセンター。

まずは、地元のニーズを拾うことから始まった。

昨年の地震と津波で、その名が全国に広がる結果となってしまった陸前高田市。港を有する平野部のほとんどが津波によって被災し、7万本あった高田松原も流失。1本だ

け残った「奇跡の松」がニュースで何度も取り上げられ、有名になりました。8000世帯あった町の約3300戸が全壊・半壊という甚大な被害に見舞われ、1500人を超える方々が亡くなり、300人近くの方が行方不明となっています（平成23年12月7日現在）。

この地に、陸前高田市社協がボランティアセンターを立ち上げたのは、3月15日のこと。以来8万人近く（10月末時点）ものボランティアを受け入れてきました。

「はじめは、何をどうしたらいいのかもわからなかったんです。それは私たちだけじゃなく、役所も誰も何もわからなかった」と語るのは、陸前高田市社協の萩原さん。

と語るのは、陸前高田市社協の萩原さん。

「まずは、地元の方々がどんなことを必要としているか、聞き出すことから始まりました。今は地元の方も、困ったことがあったらボランティアセンターに連絡すればいい、ということがわかっているので、情報は自然と集まってくるのですが、当初はまず、みなさんボランティアセンターが何をするとところかもわからない状態なので、こちらから被災者の方々のところを回ったり、チラシを配布したりして、ニーズを拾い上げなければなりませんでした」

地元の方々からの要望が出されてくると、次にしなければならないのは、その仕事がセンターでできることか、やるべきことかのジャッジです。



お話をうかがった星さん(左)と萩原さん(右)。



並ぶスコップがボランティアの活躍を物語ります。